

# 四百年の伝統を守る

## 無形民俗文化財「桜井の棒の手」



戦国の世から伝わる

桜井町下谷に  
伝わる棒の手  
「式部流」

棒の手とは、木製の棒などを使って打ち合う民俗芸能で、主に愛知県の尾張地方や西三河地方に伝わっています。その由来は、室町時代のころに農民が自衛のために始めた武術が、後に五穀豊穡祈願のための奉納行事となっていたものと考えられています。

桜井町下谷に伝わる棒の手は、式部流と称し、桶狭間の合戦（1560年）に敗れ、織田勢の追撃を逃れて下谷に落ちて来た今川家の武士式部太夫某が、この地にとどまり、農民に棒の手を教えたのが始まりとされています。また、桜井神社の祭礼記録には、安永7年（1778年）に奉納されたという記録が残っています。

式部流の演技は、棒のみを用いるものとそのほかに長刀、太刀、鎖鎌、十手、三度傘などを用いるものがあり、26種の演目から成っています。その演技の内容は、多くの流派が免許・目録など文書で伝承を行ってきたのに対し、式部流は、すべて口伝によるもので、大変珍しいものとなっています。



式部太夫の墓といわれている塚

### 立ち上がった保存会

戦後の混乱が治まりかけた昭和26年に文化財保護規定が設定され、県内の民俗芸能を保存振興する機運が高まり、各地で棒の手の保存会が発足しました。その後、30年近く中断を余儀なくされた桜井の棒の手も昔の技術を覚えていた人を集めて復活。昭和31年には保存会を立ち上げ、さらに昭和39年には愛知県無形民俗文化財に指定され現在までその伝統を守っています。



棒の手に使われていた真剣の太刀

### 途絶えやりました 棒の手

安城市内には桜井町下谷のほかにも、棒の手を伝承していた地域がありました。高棚町には棒の手の巻物が現存していますが、棒の手自体は現在に伝わっていません。また桜井神社の祭礼記録によると、同じ桜井町の印内・城向・西町の棒の手が、安永7年（1778年）に下谷の棒の手と共に奉納されたとの記録が残っていますが、いつしか途絶えてしまいました。東端町にも下谷から棒の手が伝わっていたようですが、これも今は無くなってしまいました。

そして、市内で現在まで残っている桜井（下谷）の棒の手や県内のほかの棒の手に関しても、昭和初期の戦争による人員・物資不足で中断し、一度は消滅の危機を迎えています。



「無形」民俗文化財  
無形である故の保存の難しさ

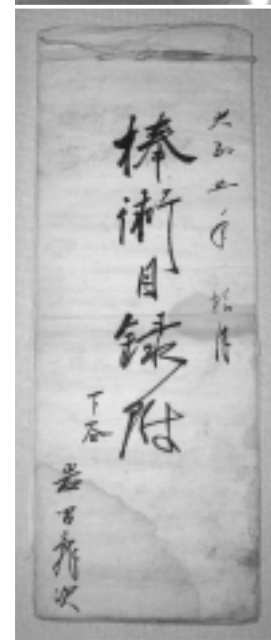
伝承は口伝

古くから、口伝のみで伝承されてきた桜井の棒の手ですが、伝承できなくなると困るということで大正時代になって「棒術目録附」という解説書が記されました。

しかし、棒の手の演技は、実際の演舞を見ないとわからないところが多く、紙に書いてあることだけで、その演目を完全に再現できるわけはありません。

そして、棒の手は基本的に1人が2、3の演目を専門に習得するという性質上、その演技者がいなくなってしまうと伝承ができなくなります。また、1演目を2人以上の対で行うため、相手がいなくなるとわからなくなってしまうこともあります。現在文書で残っている棒の手の演目のなかでも、いくつか再現できなくなってしまうものがあります。

ふじまきけんとう  
藤牧検藤流の目録と系図（豊田市棒の手会館蔵）  
棒の手の流派の多くは伝承のための文書が残されている



大正5年10月に記された式部流の棒の手の解説書「棒術目録附」。26本の演目名とともに立ち合う動きが解説されている。



棒の手で有名な豊田市にある猿投神社の祭礼の様子

未来の後継者

古くは、棒の手連中と呼ばれた組織が、桜井の棒の手を伝承してきました。42歳の頭を頂点として、桜井町下谷地区の13歳以上のすべての男性がその組織に加わっていたのです。練習の際は頭が面倒を見て、奉納は30代が主体でした。練習は田植えが済むと祭りまで毎日行っていました。

現在は、地区の小学生が保存会の指導を受けて伝承しています。毎年8月の中旬から9月の下谷の八幡社での祭礼に向けて、小学校の高学年の子どもたちが日曜日以外の毎晩、夜7時から8時30分まで練習をします。そして、それが終わると、今度は10月の桜井神社の祭礼に向けて、低学年から順番に練習を開始していきます。低学年の子は全員で行う「表」と「クダキ」のみを練習し、高学年からは少人数が対になって行う「チラシ」を練習します。



練習はまず全員で行う「表」「クダキ」で始まる

「未来へつなげていきたい  
人から人、世代から世代へと」

守つていきたい伝統がある

棒の手のこれから

現在、県内の多くの棒の手は、世代交代の時期を迎えています。しかし、次の世代を担う後継者が不足しているのが現状です。桜井の棒の手も例外ではありません。一部の子は小学校を卒業後も続けていますが、大人になっても続けていく人はおらず、今はまだ次世代が育っているとは言えない状況なのです。桜井の棒の手は、40年近くの間、口伝による伝承で多くの人がかかわって、次の世代にバトンを渡してきました。しかし、多くの人の想いを乗せた貴重な財産は、次第に消滅の危機を迎えようとしています。



練習は、下谷八幡社隣の広場で行われている



子どもたちは「師匠」から技術を学ぶ